

かみこみ乗車はキケンです



通学電車で 露出彼女に 恋したら!?

布施はるか

illustration・橘由宇
原作・クレージュ



ぶらばら文庫

プロローグ	Exhibition	5
第一章	露出	20
第二章	性癖	147
エピローグ	ism	244

この車内で俺だけが、
この少女を楽しんでいる！

見てもいい……
触ってもいいんだ……



三瀬貴史は窓の外を眺めていた。窓の外を流れる、のどかに広がる田畑と、時折思いだしたように現れては消える家々。むろん貴史は、何か目的があつて窓の外を眺めていたわけではない。ほかにすることがなかったのだ。それは、いつも繰り返される下校時の1コマ。変化のない、単調な、面白いのない日常の風景だった。

東京都心から1時間以上も離れた地域を走るローカル路線の車内は、夕暮れ時にもかかわらず乗客は疎らだ。いいや。反対方向へ向かう列車はそれなりに混んでいるし、貴史の乗る列車にしても30分ほど走ればターミナル駅に乗り入れて乗客の数も増す。貴史が乗っているこの区間だけが極端に利用者が少ないに過ぎないのである。ど田舎というほどではないものの決して都会ではない、この地域ならではのことだ。お蔭で貴史は、ギューギュー詰めの満員電車で苦勞することはなかった。

『Exhibition』 プロローグ

● 登場人物

放課後の誘い人

涼子

(りょうこ)

失恋から女性不信になっていた貴史が、通学に使う電車内で出会った、露出癖のある少女。貴史がそれに気づいたことを知った涼子は、積極的に彼を誘ってくる。自分のことは何も告げず、ただ同じ場所で毎日待ち続けるだけという、不思議な行動をとっている。もともと露出経験が多いのか、貴史を常にリードする。



けれど、やっぱり何もない街だ……。貴史は日頃からそう思っていた。彼が生まれ育った街は、ターミナル駅がある中心部こそ発展してはいるが、少しは離れただけでいきなり農村の景色が広がるといった風情だった。最近になって駅とその周辺のみ整備されこそしたものの、物心ついてから今日まで街の佇まいは基本的に変わっていない。

列車は相変わらず代わり映えない景色の中を小刻みに振動しながら走る。その揺れが貴史の心にさざ波のように広がって不愉快だった。貴史は軽く舌打ちし、着ていた学ランのボタンをすべて外した。

ほんの数カ月前、貴史は失恋していた。同じ学校のひとつ年上の先輩である新村美千代との交際は、今年のバレンタインデーにチョコをもらったことがきっかけで始まり、彼女の卒業とともに終わった。「貴史のこと、嫌いになっちゃいけないの。本当よ？」卒業式のあとで別れ話を切りだした美千代はそう言った。「東京の学校に通うから」とも。つまり上京してひとり暮らしを始めるため、地元に残る貴史との交際を続けることができないということだった。

たった数週間の交際ではあったが、貴史は美千代からふたつのことを学んだ。ひとつはセックスについて。彼女はヴァージンではなかったが、貴史の〈初めての相手〉は彼女だった。マスターベーションとは違う凄まじい興奮と快感を、貴史は美千代から教わった。短い交際の間に、何度身を重ねたことだろう。最初はマグロ状態で童貞を奪われた貴史も、

別れる前日のセックスではしっかりとリードできるまでになっていた。彼女は貴史を（一人前のオトコ）にしてくれたのだ。そして貴史は、そんなふたりの関係がこの先も続くと言じて疑わなかった。美千代と過ごした数週間は、単調で面白みのない貴史の日常が唯一輝いていた時期だった。けれど……。

彼女に未練はないさ……。貴史は、そう断言する。強がりでも負け惜しみでもない。なぜなら、貴史が学んだもうひとつのことは、〈女は絶対に信用しちゃいけない〉という確信だったからだ。

「ふう……」

小さく息を吐き、貴史は窓ガラスに押しつけていた上半身を起こした。かぶりを振るように首を巡らせ、車内に視線を転じる。平日の夕方だというのに人影の疎らな車内。すぐ近くにいるのは、同年代の少女がひとりきりだ。

胸もとを飾る臙脂色のリボンが印象的なセーラー服タイプの制服に身を包んだ少女は、貴史が陣取るボックス席の斜向かい、ふたつほど離れた席に座っていた。少女が座っているのもボックス席だが、進行方向に顔を向けて座る貴史とは逆向きの席にいたことと、通路側に座っていたことで目に留まったのである。

少女の顔を見た貴史は思わずドキリとした。よく言えば穏やかな、悪く言えば少々気怠い雰囲気窓の外をぼーっと眺めている少女の横顔は、紛れもなく美しかった。

「見たことない子だな……」

貴史は口の中でそっと呟く。このところ毎日同じ時間の列車に乗っていたが、少女を見かけたのは今日が初めてだった。少女が身に着ける制服も、このあたりの学校のものとは異なり、洗練されたデザインだった。

「偶然、乗り合わせたのかな？」

少なくとも少女は、貴史が乗り込むよりも先に列車に乗っていたはずだ。同じ駅で乗っていれば、もっと早く気づいていたであろう。貴史が乗った駅のいくつか手前の駅では、別会社の路線から乗り換えることができる。恐らくは、都心に乗り入れているその路線からの乗客なのだろう。貴史は、そう当たりをつけた。

「にしても、美人……だよな……」

とはいえ、貴史が少女にいだいた興味は、そこまでだった。所詮は縁のない娘だ。まして貴史は、一度学んだことをすぐに忘れるほどお調子者でもなかった。

女は信用できない。裏切られるのが嫌なら関わるべきではない。貴史は再び窓外の景色を眺めようとした。その刹那……。

「うわっと……」

不意に列車が大きく揺れた。それまで顔を向けていた通路側につんのめりそうになるのを必死に堪える貴史は、その拍子にある光景を目撃してしまう。彼の瞳の数メートル先、



斜向かいのふたつ先のボックス席に、予想だになかった光景があった。

「え……？」

貴史の口から小さな驚きの声が無意識に洩れる。我知らず見開いた貴史の眼には、ついさっきまで座席に座っていた少女の後ろ姿が映っていた。どうやら、列車の揺れのせいで自分の隣、窓側に置いてあったスクールバッグが床に落ちてしまったらしい。少女はそれを拾い上げようとして、いったん席を立ち、腰を屈めてバッグに手を伸ばしているところだった。もしも少女がしゃがみ込んでいたのなら、貴史も驚きはなかっただろう。けれど少女は両脚を伸ばしたまま、ただ腰を屈めてバッグに手を伸ばしていた。短いプリーツスカートの中が、ちょうど貴史の視界に入る角度で、だ。そうして貴史は見てしまった。少女のスカートの奥を……。

「ウ、ウソだろ？ 見間違いないや……、違う。でも、なんで……？」

口の中でブツブツと自問自答を繰り返す貴史は、つんのめるのを堪えたままの前のめりの姿勢で、惜しげもなくさらされる見ず知らずの美少女の尻を凝視していた。こともあろうか、彼女は下着を穿いていなかった。いいや、濃い茶色のナイロンタイツは穿いていたのだが、その下に透けるはずのショーツが見当たらなかったのだ。タイツの生地が厚いせいで見えないわけではないことは、わずかに透ける肌からも明らかである。間近に寄れば、ヒップの谷間の奥底にある秘密の部分さえも見えてしまいそうだ。それも束の間……。

「あっ!？」

貴史は、今度はハッキリと声をあげてしまう。まるで彼が見つめているのを知っていたかのように、少女がチラリと振り向いたのだ。

一瞬、目が合った。次の瞬間、少女は拾い上げたバッグを手に、貴史に向かってスタスタ歩いてくる。

マ、マズい！ なんて言おう……!! 喉から飛びだしそうになる言葉を咄嗟に吞み下して、バネ仕掛けの人形よろしくピンッと身を起す貴史。頭の中を弁解と謝罪の言葉が駆け巡るが、半ばパニック状態になってしまい、しどろもどろに口籠る。

「い……、いや、あの……、その……」

そう言う間にも、少女は貴史の前に辿り着き、彼の顔をじっと見下ろしていた。少女の顔には、不思議となんか感情も浮かんではいない。

「座っても、いいですか？」

抑揚のない声で少女が言った。容姿よりもいくぶん幼く聞こえる声だった。

「えっ？ あ……。ああ……。どうぞ」

貴史は慌てて腰を浮かし、窓際の隅に飛び退いて小さくなる。面と向かって見つめてくる少女に気圧されたこともあるが、貴史は彼女が向かいの席の通路側、つまり彼と対角線の位置に腰を下ろすと思ったのだ。ところが……。

「手伝ってあげようか？」

「んはぁ……。手伝うって……。どういうふうに？」

「こういうふうにだよ」

言うが早い貴史は、右手の人差し指と中指を重ね合わせ、涼子の指を押し退けて秘部へと突き刺した。

「ひっぐう!!」

短い悲鳴のような呻きを洩らし、涼子の背中がグンツとしなる。膣口を貫いた指が、つけ根までズッポリと呑み込まれた。

「んんっ! んっ! んあぁっ。あぁ……。あつ。あぁんっ。ん……。んんっ!」

「いやらしいオマ×コだな。こんなに汁を溢れさせて」

「はうっ!? は、はい……。はぁっ。あぁんっ!」

2本の指をペニスに見立て、貴史は激しくピストンさせる。抜き差しするたびに、媚肉の隙間から淫汁が無尽蔵に溢れ落ちた。

「なんてグチャグチャのオマ×コだ。聞こえるかい、この音? ほら。電車中に響き渡ってるよ。ジュージュー……って」

「あうっ。うう……。ううんっ。ん……。んあ、あつ。あぁあ。あ……。あぁあ……」

指の動きだけでなく言葉責めにも如実に反応し、涼子が喘ぎを大きくする。

「ほら。見てるぞ? 電車中の人が、その格好を見てるぞっ」

「あふっ、ん……。んんっ! い……。あつ、嫌あ! 見ちゃ、ダメえ……。!! はぁっ、はぁっ。あぁんっ!」

言葉とは裏腹に、涼子はますます興奮していく。実際にはふたりのほかに車両の中には誰もいなくとも、前後の車両の乗客が覗いているかもしれない。あるいは、この車両に移動してくるかもしれない。そう考えるだけで、涼子は際限なく興奮していった。

「くっ! はぁんっ。あ……。あつ。あつ! ん……。ふぁっ!」

ドアに身を押しつけ、髪を振り乱し、腰をくねらせる美少女。貴史の指の動きもどんどん激しくなる。そうして……。

「あぁん! わ、わたし……。もうっ! んんっ、んあぁっ。イ、イク……。イクっ」

涼子が限界を訴えた。すかさず貴史は、親指で充血した淫核を弾く。

「んあぁ……。!? あつ、あぁあぁあぁあぁあぁあぁーんっ!!」

派手な嬌声をあげて、ついに涼子は達した。指を咥える媚肉がキュンと縮まり、わずかな隙間から愛液がしぶく。車両内に響いた絶頂の叫びが消えるなり、涼子は膝をガクガクわななかせ、ズルズルと床にへたり込んでいく。

「おっと……。大丈夫かい?」

寸でのところで貴史に支えられ、今にも昏倒しそうな涼子はボックス席へと連れられて

いった。ちょうどそのタイミングで、列車が駅に到着する。開いたドアから年老いた女性がひとり乗り込んだ。それを横目に、貴史は涼子と向かい合う席に腰を下ろす。

「はあ……、はあ……、んっ。はあ……」

オーガズムに浸り、涼子は座席に身を預けて肩で息をしていた。ひとたび列車が走りだせば、次は彼女の降りる駅である。貴史は乗車した老婆が離れた席に座つたのを確認すると、高々と TENT を張ったズボンのファスナーを下ろしながら言った。

「こっちも、気持ちよくしてくれる？」

「んはあ……。はあ……。いいですよ……」

座席の背から身を起こした涼子が、ズボンから飛び出した剛直を握る。それだけで貴史は愉悅の声を洩らした。

「ん……。ああ……」

涼子の指は快楽のポイントを的確に押さえていた。加えて貴史は、さつきから興奮しっぱなしで素直に刺激を受け入れてしまう。

こんなことなら、最初からエッチしてればよかった……。次の駅で終わりののが悔やまれる。快感に身を委ねながらも、貴史はふとそんなことを考えていた。すると……。

「ん……？」

気がつけば、涼子の手動きが止まっている。肉竿を握つたまま、彼女は貴史の顔を覗

き込んでいた。

「あんまりよくないですか？」

「えっ？」

「なんだか、考え事してるみたいだったから……」

そう言われ、貴史は焦つてしまう。そう。今は、つまらぬことを考えている場合ではない。それこそ時間のムダだ。慌てて言い訳を口にする。

「ち、違うんだよっ。そうじゃなくて……」

「じゃあ、こういうのはどうですか？」

「う……!!」

剛直に薄布が巻きつけられた。それは、彼女が脱いだショーツだった。火照った肉棒を包む生地は少しひんやりして心地よかった。涼子のぬくもりが消えてしまったからだけではない。染み込んでいる愛液のせいである。ショーツを巻きつけた上から、彼女は手淫を再開させた。

「うっ！ あ……、ああ……」

単純に手するのはまた違った、新鮮な感覚が貴史を襲う。

「どうですか？ スベスベだから、気持ちいいでしょう？」

「あ、ああ……。ホントに」

飾り気のないシンプルなデザインのものには、そうであるからこそ、肉棒を満遍なく包み込んでいた。しかも、頬擦りしたくなるほどの滑らかさだ。

「気持ちいいんですよ、シルクの下着って。綿パンとは肌に当たる感触が全然違って。同じようにスベスベの化繊とも、微妙に違うし」

「いい趣味してるね……」

その一言に、涼子がクスッと笑う。

「えっ？ なに？」

「ふふっ。《いい趣味》って、下着がですか？ それとも、こつちですか？」

悪戯っぽく言いながら、涼子がショーツの上から怒張をギュッと握り締めた。

「い、いや、下着のほうだよ。よくわかんないけど、素材とか、いいカンジだなあって」

「好きなんです、下着でオシヤレするの」

「見てもらいたいから？」

「そうですね。見られてもいいように、です」

とはいえ涼子は、美千代と違って色柄や装飾にこだわっているわけではない。むしろ、素材や穿き心地を重視しているふうである。

それこそ趣味の違い、なのかな……？ シンプルなデザインは清楚さを際立たせているし、高級な素材はいかにもお嬢様らしいと思える。下着ひとつで持ち主の個性を存分にア

ピールできるのだから、やはり趣味がいろいろだろう。

「でも……、そうですか。いい趣味って、下着のことだけなんですか……」

「あ、ああ。そう、だよ」

「じゃあ、これはお好みじゃありませんか？」

ショーツの生地越しに肉棒を握り締めていた手が動いた。滑らかで柔らかく、どこか優しい刺激が貴史を翻弄する。まるで包皮の中に封じ込められた亀頭を弄ばれているような感覚だ。堪らず貴史は、わずかに腰を引いて快感に震える。

「す、好きだよ……、こつちも。気持ち、いい」

「そう言われると、わたしも興奮しちゃいます」

事実、涼子の表情には、絶頂を迎える以前に見せていた高揚感が滲んでいた。トロンと蕩けた瞳に妖しい光を宿し、頬を紅潮させて譫言のような呟きを洩らす。

「さっきまで穿いてた下着で……、ヌルヌルもいっぱいいついてるのに……、それなのに、オチ×ポ、シコシコされて気持ちいいなんて。あ……、ああん。はあっ、はあ……。一緒に気持ちよくなりましょうね」

またしても、涼子のセリフが貴史を高ぶらせた。涼子と身も心もひとつになる。そんな妄想を思い描き、イチモツへの愛撫に、その快楽に酔いしれる。列車の揺れとは別に、貴史の身はユラユラと揺れた。陰囊に滾る熱い粘液が亀頭へと這い上がっていく。



「ヤ、ヤバい……。ヤバいよっ」

「何が、ヤバいんです？」

可愛らしく小首を傾げる涼子。それでも、彼女の手は動きを止めない。シルクの生地が脈打つ怒張を擦り続ける。貴史は情けない声で訴えた。

「で、出ちゃいそうなんだっ」

このまま射精すればショーツを汚してしまう。貴史のためらいを、けれど涼子はあつさり打ち消す。

「いいですよ。このままイッて下さい」

「えっ？ だ……。だけど……」

「見てみたいんです。あなたが、どんな顔でいくのか。わたしの下着、汚して下さい」
淫蕩な笑みを浮かべた涼子が、ラストスパートとばかりに陰茎を猛烈に掻き上げる。押し寄せる目眩く快感。甘やかな痺れとともに股間がキューンと疼く。もはや貴史には、込み上げる高ぶりに抗う術がなかった。

「くっ!! ううっ、うっ! ううううっ!!」

怒張がドクンと跳ね、ブワッと開いた鈴口から白濁液が迸る。

「ああ……! オチ×ボが凄く膨らんで……、ピクピクしてますっ。ああっ。凄い……。もっと……。もっと精液を出してっ」

「ああ……、ああ……、あううつ！」

乞われるままに、貴史は精を吐きだした。だがしかし、肉棒を包むショーツのせいで灼熱の粘液は行き場を失っていた。純白のショーツに濡れ染みが見る見る広がり、生地が吸収しきれなかった白濁が涼子の指を汚していく。

「ああ……。熱い……。ありがとうございます。いっぱい出してきて……」

涼子がうつとりとした表情で告げた。対する貴史は、あまりの快感に腰砕けとなり、ともに返事もできない。虚ろな瞳でぼんやりと自分の股間を眺めていると、涼子の手が射精を終えて半萎えのペニスをショーツで綺麗に拭ってくれた。それを済ませるなり、彼女は予想もつかないことをしだす。

「えっ!？」

さすがに貴史は驚きの声をあげた。こともあろうか涼子は、精液塗れのショーツを、そのまま穿き直したのだ。

「んっ。はあ……。はあ……。はあ……。ヌルヌルして……。あつたかい……」

「あ……。ああ……。あ……」

哑然とする貴史に、涼子は恍惚の笑みを向ける。

「今日は、どうもありがとうございました」

「くは……。はあっ。お……。俺のほうこそ……。ありが……。とう」

喘ぐ貴史が辛うじて応じると、涼子はいささか心配そうな表情をした。

「疲れませんでしたか？ わたし……。ちよつと夢中になりすぎたみたいです」

「い、いや……。大丈夫。疲れてなんか……。いないよ」

「だったら、いいんですけど。ちよつと体力、使わせすぎかな……。って」

言われた貴史は、半ば強引に呼吸を落ち着かせて微笑む。

「ん……。そんなに気を遣わないでよ。俺は、キミが愉しんでくれるのが一番嬉しいし、それに、俺自身もいい思いさせてもらってるしね」

「そう言ってもらえると助かります。やつぱり、あなたを選んだのは間違いないじゃなかったみたいです」

「そいつはどうも。光栄だよ」

その時、どこからともなく発車のチャイムが聞こえてきた。いつの間にか列車は、涼子が降りる駅に到着していたのだ。

「あふう……。それじゃあ、また明日」

スカートの奥から白く濁った雫をポタポタと滴らせる涼子が、ひとりホームへと降りていく。その後ろ姿を、貴史はただ茫然と見送ることしかできなかった。

「あなたを選んだ、か……」

走りだした列車の中で、貴史はポツリと呟くのだった。

ぶちばら文庫

通学電車で露出彼女に恋したら!?

(つうがくでんしゃで ろしゅつかのじよに こいしたら)

2011年 3月10日 初版第1刷 発行

■著 者 布施はるか
■イラスト 橘由宇
■原 作 クレージュ
【Exhibitionism 露出性癖より】

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©HARUKA FUSE ©そふとさ〜くるクレージュ

Printed in Japan 2011

PP012

ぶちばら文庫17

沖田和彦 著

熊虎たつみ 画

Parthenon 原作

定価 670円(税込)

珊ちゃんはある伝説の十二天使の
生まれ変わりなんですっ!!

妹の誕生日に現れた天使コエルは、そう
言って珊を天界へ連れて行こうとした。
唯一の家族を失うわけにもいかず、護は
謎の神父の言葉を信じることにする。そ
れは、珊のお腹に新しい命を宿せば、連
れ去られずにすむというもので…。



妹天使は、
赤ちゃん作らないと昇天しちゃうよ!

妹天使は、
赤ちゃん作らないと昇天しちゃうよ!



いもつと ばら
妹★ませつくす

描き下ろし挿絵も
収録予定!

4月 発売予定

入箱 Virgin Territory 少女



表紙は「じろう」氏の
描き下ろしです!



無垢なお嬢様は、
脅され犯され穢される……

ぶちばら文庫16

春風葉 著

じろう 画

クレージュA 原作

定価 670円(税込)

4月 発売予定

Courreges A
ぶちばら文庫

ぷちぱら文庫は ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。

応募規定は、それぞれ以下ようになります。

皆様のご応募をお待ちしております!

1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方へのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間～1か月ほどお時間がかかります。

4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。
メールの宛先: desk@parabook.co.jp

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。